

技術・実践

超緊急帝王切開術対応への取り組み ～シミュレーション教育の評価～

盛岡赤十字病院 手術室

赤川 理佳

【はじめに】

A病院手術室では、2015年1月より超緊急帝王切開術を定義し対応を開始した。手術室看護師は、夜間休日は待機制をとっているため、超緊急帝王切開術を迅速・安全に実施するために、多職種での学習が必要と考え、シミュレーション教育を取り入れた。初めの5回はタスクトレーニングとし、その後2回はシナリオベーストレーニングの形式で、現在までに7回実施している。

【目 的】

シナリオベーストレーニングで実施した2回のシミュレーションに焦点をあて実施を振り返り、シミュレーション教育の現状把握と課題を明らかにする。

【方 法】

対象：シミュレーションに参加した手術室看護師、病棟看護師・助産師、産科医師
期間：2016年11月～2017年4月
方法：2回のシミュレーション実施後、参加者で意見交換・質問紙調査実施。
分析方法：質問紙は単純集計。(倫理的配慮)所属の倫理審査委員会の承認を得た。対象者に研究の趣旨、結果の公表、個人情報保護について説明し、参加・回答をもって同意とした。

【結 果】

1回目参加者18名。回収率88.8%。質問紙のシ

ミュレーションは超緊急時に役立つか「非常に役立つ93.8%」自信がついたか「あまりつかない25%」だった。2回目参加者18名。回収率61.6%。質問紙のシミュレーションは超緊急時に役立つか「非常に役立つ63.6%」自信がついたか「あまりつかない36.4%」だった。意見交換で「ものに触れながらでき良い」「患者のそばにいる役割を誰がするか」等の意見がでた。

【考 察】

今回、シミュレーション教育を取り入れ学習できたことは、「超緊急時に役立つと思う」と答えた参加者が6割以上だったことから、お互いの動きを把握し、より実践に近い形で学習することが出来たと考える。しかし、「自信がついたか」の問いで、3割の参加者があまりつかないと答えており、参加者が「自信がついた」と思えるようになるまでには、繰り返しシミュレーションを行うことが必要である。今後は、シナリオ設定も変え様々な場面を想定しシミュレーションを実施していきたい。また、シミュレーション後に意見交換することで、多職種で問題を共有し改善策を見出すことができ、超緊急時の対応の見直しにつながっている。

【ま と め】

超緊急帝王切開術対応にシミュレーション教育を取り入れたことで、お互いの動きを把握し、より実践に近い形で学習することが出来る。

(本論文の要旨は平成29年11月4日 第31回日本手術看護学会年次大会で発表した)